

大妻女子大学英文学会50周年：「華の英文科」をもう一度

| | |
|-----|---|
| 著者 | 武藤 哲郎 |
| 雑誌名 | Otsuma review |
| 巻 | 50 |
| ページ | 7-8 |
| 発行年 | 2017-07-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1114/00006483/ |



大妻女子大学英文学会 50 周年 ——「華の英文科」をもう一度

会長 武藤 哲郎

私事ながら、私が大妻に着任してから 26 年になります。学短分離でローテーションが終わりに近付いたころ、学部小林昌夫先生、石木先生、短大の中野先生、守田先生と一緒に 5 名の先生が同時期に着任しました。当時短大は 1・2 年合わせて 12 クラスあり、総勢 720 名の大所帯でした。入試の手採点にはまる 2 日かかったことを憶えています。学生の学力もかなり高く、就職先もみずほ銀行等にたくさんの学生が内定していました。まさに私達が大妻に来たときは「華の英文科」の時代でした。

以来 18 歳人口の激減に伴って、2017 年現在短大 1・2 年合わせて 4 クラス、学生は 95 名、専任教員は 4 名のまさにこぢんまりとした所帯となってしまいました。『OTSUMA REVIEW 創設 40 周年特別記念号』には会長の井上美沙子先生と田中英史先生が記事を書かれていらっしゃる。今回この号には田口先生も記事を寄せられていらっしゃいますので、私はこの 10 年の思い出を短大中心に書かせていただきます。

10 年前の 2007 年、短大の専任教員は 9 名でした。中野先生そして春原先生が定年退職で大妻を去られたのを皮切りに、米塚先生、豊田先生そして守田先生がそれぞれ比較文化学部とコミュニケーション文化学科へと異動になりました。短大の定員削減に伴い補充人事は行わないことになって、だんだんと英文科を取り巻く環境が寂しくなってきました。そんなときです。急にリバシッジ先生がこの世を去られたのは。リバシッジ先生はビールとサッカーが何より好きで、自分でジョークを言っては大きな声で笑う、英文科にとってなくてはならぬ明るい性格の持主でした。個人的には親友と思っていましたので打撃はかなりのものでした。お葬式に際して、奥様が涙ではなく明るい笑いのあるスピーチにしてほしいと私に頼まれましたので、恐る恐る少しジョークを交えたお別れの言葉にしたところ、私に続いた 5 人のイギリス人の方々もリバシッジ先生にまつわるエピソードを披露して、会場は笑いの渦となりました。リバシッジ先生の交流の広さ、そしてお人柄を窺わせる

会でした。

英文学科そして英文科を取り巻く環境はこの10年で大きく変わろうとしています。そういった勢いを肌で感じることができたのは短大学部長を務め広い視野から大妻を眺めることができたからでした。短大には家政科があって、私たち文系とは研究分野が違っていて視点というか考え方が微妙に違うことを知りました。多摩には比較文化学部に加えて、社会情報学部、人間関係学部があって、もう理系の先生たちですので委員会等での発言を聞いていても我々文系の人間とは発想が根本的に違う印象を受けました。その人たちが今回G棟・H棟の完成に伴って千代田にやってきます。今まさに大妻が大きく変わろうとしています。

大妻に46年お勤めになった河野先生が最終講義のレセプションでちらっと「もう少し‘seniority’を敬って欲しい」という趣旨のことをおっしゃっていました。この10年で大妻は世代交代というか、どんどん昔からいた先生が大妻を去り、どんどん新しい先生が入って来ました。英文学科も隈部先生、田中先生、山名先生、小林史子先生、坂口先生、兵頭先生、Thornton先生、栗原先生がすでに去られています。私からすると、「三尺下がって師の影を踏まず」ではありませんが、学問の世界においては尊敬する先生たちばかりでした。学部長をしているといろんな出来事があるその対応をしているとき、大妻の古き良き伝統と悪しき伝統が残っていることを痛感しました。良き伝統はその懐の深さです。

G棟・H棟が完成して外側が出来上ったので、今度は中身の充実です。大妻の学生をいかに育てるのが喫緊の課題です。英文科は定員の削減でごんまりとした所帯になりましたが、指定校推薦の基準を上げたせいか、優秀な学生が入って来ています。授業における集中力はひと昔前に比べると格段に上がっていますし、就職率も高くなり、有名企業からも徐々に内定をもらえるようになりました。「役に立つ英語教育」のせいか、見事に学生の「読みの力」が衰えました。昔、短大に「原典購読」という科目がありました。英語をしっかりと読むことに力を入れて「華の英文科」を取り戻そうと先生たちと話し合っている今日この頃です。